

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

## <研究ノート> 小学校におけるシンボルツリーの巨樹に係わる児童の意識

著者	長友 大幸, 松本 望
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	19
ページ	375-382
発行年	2019-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00001258/">http://id.nii.ac.jp/1354/00001258/</a>



# 小学校におけるシンボルツリーの巨樹に係わる児童の意識

## The Consciousness of the Children toward a Big Tree Acting as a Symbol in an Elementary School

長 友 大 幸・松 本 望

NAGATOMO, Hiroyuki MATSUMOTO, Nozomi

### 1. はじめに

校庭の樹木は児童にとって身近にある自然であり、樹木を授業で活用することによって植物や自然を大切にしている児童の心情を育むことができることが指摘されている<sup>1)</sup>。登下校時や休み時間などの授業以外の場面でも児童が樹木を目にしたたり触れたりする機会がある。日常的に樹木に接していた児童は、その後の樹木保護に対する意識の向上につながるとの報告<sup>2)</sup>があるが、そうした校庭の樹木の中でも、シンボルツリーである巨樹は児童が最も親しみを持っている樹木だと考える。そうしたシンボルツリーに関わる児童の意識を探った研究は多くは見られず、同様のケーススタディを重ねていく必要があると考える。

本研究では、小学校の巨樹に対する児童の意識及び関わり、授業での巨樹の活用の有無及びそれらの関係性などを調査することとした。

### 2. 調査地の選定及び調査方法

#### (1) 調査地の選定

本研究では、「シンボルツリーと言われる巨樹が校庭にある小学校」、「校庭の樹木や巨樹

を使った取り組みを行ったことがある小学校」、「中学年から高学年にかけての児童からアンケートが回収できる小学校」の条件を満たす埼玉県A小学校を調査地とした。

#### (2) 調査方法

##### 1) 現地調査

校庭に残存する巨樹の現況と授業や行事等への活用状況を把握するために現地踏査及びインターネット及び文献等による調査を行った。

##### 2) アンケート調査

児童の巨樹に対する意識、巨樹との触れ合いについて把握するためアンケートを行った。アンケート用紙は4～6年生を対象に4年生の各クラスに36部ずつ、5年生と6年生の各クラスに40部ずつ用意した。配布は平成27年11月下旬から12月上旬にかけて行った。回収数は4年生131枚、5年生107枚、6年生115枚、合計353枚であった。

##### (i) 巨樹に対する意識

シンボルツリーであるクスノキの巨樹に対する児童の意識について調査するため、「景色を

---

キーワード：シンボルツリー、小学校、教育的活用  
Key words : symbol tree, primary school, educational utilization



図1 シンボルツリーのクスノキ<sup>3)</sup>



図3 校庭のケヤキの巨樹<sup>5)</sup>



図2 マスコットキャラクター「くすのさん」<sup>4)</sup>

よくしてくれると思う」「歴史を感じさせてくれる」など、クスノキの巨樹に対する考えをたずねる質問を用意した。そして、各質問で「思う」「少し思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「思わない」の5段階で回答を求めた。

#### (ii) 巨樹との触れ合い

学校生活やその他の場面での巨樹との関わ

りについて調査するため、クスノキの巨樹に関する話を聞く頻度、クスノキに関する授業やその周辺で授業を受けた頻度などについてたずねた。それぞれの質問ともに5段階の選択肢で回答を求めた。また、「一番親しみを感じている木はどこにある木ですか」との質問から、児童がクスノキをどのように感じ、関わっているのか考察することとした。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 現地調査

調査地であるA小学校の校庭には目立つ大きな巨樹が2本残存している。そのうちの1本は、校歌に「緑のくすに 朝日さす」の出だしで歌われているように、クスノキの巨樹<sup>3)</sup>がシンボルツリーとして残存している。図1に示したように、根元は児童の侵入による根の踏圧を防ぐため柵が施されており、根元まで立ち入ったり木に登ったりすることはできない。また、図2のような学校のマスコットキャラクター「くすのさん」<sup>4)</sup>として取り上

小学校におけるシンボルツリーの巨樹に係わる児童の意識



図4 ケヤキでのツリークライミング<sup>5)</sup>

表2 クスノキに対する意識（歴史感）

歴史感	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
思う	57	43.5	60	56.1	70	60.9	187	53.0
少し思う	41	31.3	23	21.5	23	20.0	87	24.6
どちらとも いえない	13	9.9	8	7.5	12	10.4	33	9.3
あまり 思わない	12	9.2	4	3.7	5	4.3	21	5.9
思わない	8	6.1	9	8.4	5	4.3	22	6.2
無回答	0	0.0	3	2.8	0	0.0	3	0.8

げられており、学校全体でシンボリック的存在としてクスノキを捉え認知されている。2本目はケヤキで、根の踏圧を防ぐとともに夏にケヤキがつくる木陰による緑陰効果を児童が感じられるように根元を囲むようにベンチが施されている（図3<sup>5)</sup>）。ケヤキはエコクラブなどで実施しているツリークライミングを行う樹木として活用されており（図4<sup>5)</sup>）、児童にとってはクスノキよりも接して活用していることが考えられる。

(2) アンケート調査

(i) クスノキに対する意識

①景色をよくする

景色を良くしてくれると「思う」児童の割

表1 クスノキに対する意識（景色形成）

景色形成	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
思う	78	59.5	59	55.1	59	51.3	196	55.5
少し思う	38	29.0	29	27.1	39	33.9	106	30.0
どちらとも いえない	8	6.1	4	3.7	10	8.7	22	6.2
あまり 思わない	6	4.6	3	2.8	2	1.7	11	3.1
思わない	1	0.8	9	8.4	5	4.3	15	4.2
無回答	0	0.0	3	2.8	0	0.0	3	0.8

表3 クスノキに対する意識（安らぎ）

安らぎ	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
思う	78	59.5	56	52.3	39	33.9	173	49.0
少し思う	26	19.8	27	25.2	44	38.3	97	27.5
どちらとも いえない	12	9.2	7	6.5	14	12.2	33	9.3
あまり 思わない	11	8.4	5	4.7	12	10.4	28	7.9
思わない	4	3.1	9	8.4	6	5.2	19	5.4
無回答	0	0.0	3	2.8	0	0.0	3	0.8

合は4年生78人(59.5%)、5年生59人(55.1%)、6年生59人(51.3%)であった(表1)。「少し思う」の回答を合わせると、4年生116人(88.5%)、5年生88人(82.2%)、6年生98人(85.2%)と、いずれの学年も80%を超えていた。クスノキは校門を入れて一番はじめに目に止まる場所に残存しており、良好な景観を形成している。このことが児童のクスノキに対する意識に影響を及ぼしているものと考えられる。

②歴史を感じさせてくれる

クスノキの巨樹が「歴史を感じさせてくれる」と思っている児童の割合は「思う」「少し思う」を合わせると、4年生98人(74.8%)、

表4 クスノキに対する意識（季節感）

季節感	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
思う	89	67.9	47	43.9	44	38.3	180	51.0
少し思う	24	18.3	33	30.8	39	33.9	96	27.2
どちらとも いえない	10	7.6	9	8.4	8	7.0	27	7.6
あまり 思わない	5	3.8	4	3.7	6	5.2	15	4.2
思わない	3	2.3	11	10.3	18	15.7	32	9.1
無回答	0	0.0	3	2.8	0	0.0	3	0.8

5年生83人（78.6%）、6年生93人（80.9%）となった（表2）。このことから、「歴史を感じさせてくれる」感覚を持つ児童は、学年が上がるにつれてその割合が高くなることogaうかがえた。しかし、いずれの学年も、クスノキが学校のシンボルとして昔から立っているという認識があり、歴史感を抱いている児童が多いものと考えられる。

③木の陰がやすらぎを感じさせてくれる

「木のかげがやすらぎを感じさせてくれる」に対して「思う」「少し思う」児童は、4年生104人（79.3%）、5年生83人（77.5%）、6年生83人（72.2%）であった（表3）。3学年の間に大きな差はなく、同様に高い割合を示していた。ケヤキの周りに施されているようなベンチ等はないものの、登校時にいつもそばを通り抜けており、その際に緑陰による安らぎを感じているためと考えられる。

④落ち葉が季節を感じさせてくれる

「落ち葉が季節を感じさせてくれる」と「思う」児童は4年生89人（67.9%）、5年生47人（43.9%）、6年生44人（38.3%）であり、4年生が最も高い割合となった（表4）。また、「少し思う」を加えると、4年生113人（86.2%）、

表5 クスノキに対する意識（守り神）

守り神	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
思う	68	67.9	47	43.9	44	38.3	180	51.0
少し思う	22	16.8	29	27.1	36	31.3	87	24.6
どちらとも いえない	17	13.0	10	9.3	23	20.0	50	14.2
あまり 思わない	14	10.7	11	10.3	16	13.9	41	11.6
思わない	10	7.6	17	15.9	12	10.4	39	11.0
無回答	0	0.0	3	2.8	1	0.9	4	1.1

表6 クスノキへの接触頻度

接触頻度	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
よくある	74	56.5	31	29.0	24	20.9	129	36.5
たまにある	44	33.6	39	36.4	59	51.3	142	40.2
どちらとも いえない	2	1.5	5	4.7	5	4.3	12	3.4
あまりない	8	6.1	15	14.0	13	11.3	36	10.2
ない	3	2.3	11	10.3	12	10.4	26	7.4
無回答	0	0.0	6	5.6	2	1.7	8	2.3

5年生80人（74.7%）、6年生83人（72.2%）と、多くの児童が季節感を感じていた。クスノキの落葉は春先に起こり、ケヤキのように一斉に黄葉したり落葉したりはしない。しかし、その落葉は相当量であり、多くの児童に認識されていると考えられる。

⑤いつも見守ってくれる守り神のようなもの

「いつも見守ってくれる守り神のようなもの」と「思う」「少し思う」回答は4年生が最も多く90人（68.7%）、次に5年生66人（61.7%）、6年生63人（54.8%）となった（表5）。どの学年も半数以上の児童がクスノキをいつも見守ってくれる存在であると思っていた。昔から校庭の端に立っている大きなクスノキは、夏の暑いときは緑陰による安らぎ、

表7 クスノキに対する保護意識

接触頻度	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
絶対に守ってほしい	84	64.1	50	46.7	38	33	172	48.7
できれば守ってほしい	24	18.3	28	26.2	48	42	100	28.3
わからない	10	7.6	15	14.0	15	13	40	11.3
切られてもしかたがない	9	6.9	7	6.5	10	9	26	7.4
その他	3	2.3	4	3.7	4	4	11	3.1
無回答	1	0.8	3	2.8	0	0	4	1.1

表8 クスノキの話を書く頻度

接触頻度	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
よくある	31	23.7	6	5.6	1	0.9	38	10.8
たまにある	31	23.7	16	15.0	19	16.5	66	18.7
どちらともいえない	24	18.3	13	12.1	20	17.4	57	16.1
あまりない	17	13.0	35	32.7	37	32.2	89	25.2
ない	27	20.6	34	31.8	38	33.0	99	28.0
無回答	1	0.8	3	2.8	0	0.0	4	1.1

表9 クスノキの話を書いた人

聞いた人	4年生 (n=62)		5年生 (n=22)		6年生 (n=20)		合計 (n=104)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
担任の先生	32	51.6	7	31.8	6	30.0	45	43.2
校長先生	29	46.8	14	63.6	12	60.0	55	52.9
保健の先生	0	0.0	0	0.0	1	5.0	1	1.0
その他の先生	10	16.1	6	27.3	5	25.0	21	20.2
家族	23	37.1	8	36.3	6	30.0	37	35.6
その他	21	33.9	4	18.2	3	15.0	28	27.0

春先の落葉は迷惑ではなく季節感というように、それぞれ多くのプラス効果を校庭で遊ぶ児童たちにもたらしってきた。このことがまるで児童を見守っているかのように感じたためと推察される。

(ii) クスノキとの触れ合い

①クスノキへの接触頻度

クスノキのそばで遊んだり、立ち話をしたりするなど近づくことが「よくある」と回答した児童は、4年生74人(56.5%)、5年生31人(29%)、6年生24人(20.9%)であり、4年生の児童の割合が高くなっていった(表6)。また、「たまにある」児童を加えると、4年生118人(90.1%)、5年生70人(65.4%)、6年生83人(72.2%)であった。したがって、4年生の児童の9割がクスノキのそばで遊んだり、立ち話をしたりした経験があることになる。これは、教師が授業等でクスノキを取り上げる頻度が高いことに基因していると推察される。

②クスノキに対する保護意識

クスノキが何かの理由で切られそうになったとしたら、「絶対に守ってほしい」と回答した

児童は、4年生84人(64.1%)、5年生50人(46.7%)、6年生38人(33%)であった(表7)。クスノキに近づく頻度が高かった4年生がクスノキに対する保護意識も高い割合となっていた。このことから、既往の研究<sup>6)</sup>で指摘されているように、保護意識は日常的な接触頻度に大きなかわりがあるものと考えられる。クスノキを「絶対に守ってほしい」という思いは、日頃のクスノキとの関わりを通して抱いた愛着心によるものと推察される。なお、「できれば守ってほしい」を加えると、4年生108人(82.4%)、5年生78人(72.9%)、6年生86人(74.7%)となり、いずれの学年の児童も保護意識を持つ割合は高いことがわかった。

③クスノキの話を書く頻度

表8に示すように、学校のクスノキの話を、だれかから聞くことが、「よくある」と答えた児童は4年生が最も多く、31人（23.7）%であった。5年生は6人（5.6%）、6年生は1人（0.9%）と4年生と比較すると少なかった。なお、4年生の31人のうち23人が同じクラスの児童で占められていた。表9には具体的に誰から話を聞くのかをたずねた結果を示している。4年生では「担任の先生」「校長先生」が多かった。また、「よくある」と答えた4年生31人のうちの23人を占めたクラスの児童は、その多くが「担任の先生」と回答していた。一方、4年の他のクラスでは「担任の先生」を選択した児童は少なく「その他の

先生」を選択しており、そこには23人の児童が所属するクラスの担任名をあげる児童が多かった。既往の研究<sup>7)</sup>では、校庭の巨樹に対する児童の意識向上には指導する側の教員の存在の重要性が指摘されている。本研究においても、よく話を聞く4年生が最も保護意識が高い結果となっており、同様の傾向を感じることができた。そこには熱心に指導する教員の存在がうかがうことができ、既往の研究<sup>1)</sup>で指摘されているように指導者の育成が環境教育の推進には重要であると考えられる。

④クスノキを調べたり、クスノキの周りで授業を受けたりした経験

クスノキを調べたりクスノキの周りで授業を受けたりしたことが「よくある」と答えた児童は、4年生40人（30.5%）、5年生8人（7.5%）、6年生1人（0.9%）であった（表10）。したがって、ここでも「話を聞く頻度」と同様に4年生が最も多かった。なお、どの授業で実施したかを探ったところ、いずれの学年も「総合的な学習の時間」が最も多く、クスノキの幹の太さをはかったり歴史を調べたりしていた。しかし、4年生は他学年と異なり「理科」の授業での活用が多く、カブトムシの幼虫のために落ち葉を集める活動を

表10 クスノキを活用した授業の受講経験

授業受講経験	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
よくある	40	30.5	8	7.5	1	0.9	49	13.9
少しある	22	17.6	23	21.5	27	23.5	73	20.7
どちらとも いえない	17	13.0	16	15.0	26	22.6	59	16.7
あまりない	34	26.0	27	25.2	31	27.0	92	26.1
ない	16	12.2	24	22.4	25	21.7	65	18.4
無回答	1	0.8	9	8.4	5	4.3	15	4.2

表11 クスノキを活用した授業の受講後の変化

巨樹や他の木に対する意識	4年生 (n=63)		5年生 (n=31)		6年生 (n=28)		合計 (n=122)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
巨樹を大切に思うようになった	41	65.1	10	32.3	16	57.1	67	54.9
休み時間や帰りなど、巨樹の近くに行くようになった	34	54.0	9	29.0	9	32.1	52	42.6
巨樹の葉や実、種に興味をもつようになった	29	46.0	11	35.5	5	17.9	45	36.9
巨樹の他の木にも興味をもつようになった	19	30.2	8	25.8	8	28.6	35	28.7
巨樹について自分で何か調べてみた	10	15.9	8	25.8	4	14.3	22	18.0
巨樹の他の木について自分で考え、何か調べてみた	8	12.7	5	16.1	5	17.9	18	14.8
巨樹の他の木も大切に思うようになった	41	65.1	18	58.1	16	57.1	75	61.5
その他	3	4.8	3	9.7	0	0.0	6	4.9

表12 最も親しみのある木

親しみを 感じる木	4年生 (n=131)		5年生 (n=107)		6年生 (n=115)		合計 (n=353)	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
クスノキ	89	67.9	57	53.3	64	55.7	210	59.5
ケヤキの木	15	11.5	13	12.1	17	14.8	45	12.7
公園の木	10	7.6	4	3.7	8	7.0	22	6.2
道路にある木	3	2.3	6	5.6	1	0.9	10	2.8
社寺の木	0	0.0	7	6.5	9	7.8	16	4.5
その他	13	9.9	13	12.1	10	8.7	36	10.2
無回答	1	0.8	7	6.5	6	5.2	14	4.0

行っていた。こうした理科の授業での活用が4年生の結果に大きく影響しているものと推察される。

#### ⑤巨樹を調べたり、授業を受けたりした経験による意識の変化

学校の中でクスノキを調べたり、クスノキの周りで授業を受けたりしたことが「よくある」「少しある」と答えた児童に、その前後でクスノキや他の樹木に対する意識の変化をたずねた。その結果、4年生では「巨樹を大切に思うようになった」「巨樹の他の木も大切に思うようになった」との回答が最も多かった(表11)。3学年の合計を見てもこの2項目がともに50%を超え、高くなっている。授業内で巨樹を取り上げることによって、どの学年の児童も巨樹やその他の樹木を大切にしようという心情が育まれていることがうかがえた。したがって、学校での学習経験は、その後の児童の意識に大きな係わりを持っていると考えられ、教育の質と量の向上、指導者の育成が重要であると考えられる。

#### ⑥最も親しみを感じている木

先述したように、シンボルツリーであるクスノキの他にケヤキの大木が存在し、児童が接する機会が多く見られる。そこで、身近で一番親しみを感じている樹木を尋ねた。その結果、どの学年も最も多かった回答は「学校にあるクスノキ」であった(表12)。学校のクスノキを選択した児童の割合は3学年合計で210人(59.5%)であった。樹木を用いた概念的な教育よりも体験的な教育を取り入れるほうが、児童は樹木に対して親しみを持つとの報告がある<sup>8)</sup>。しかし、本調査校では、シンボルツリーであるクスノキの巨樹は、ツリークライミングなどで活用されることがあるケヤキよりも親しみを持つ児童が多く、学年に関係なく多くの児童が親しみを感じている樹木であることがわかった。概念的な教育でも、そのやり方しだいで効果が得られるとされている<sup>7)</sup>が、こうした児童のクスノキに対する意識は、クスノキが校歌に歌われたりイメージキャラクターに用いられたりしていることが効果的な概念的教育となっているためと考えられる。

## 5. おわりに

多くの児童は、クスノキの巨樹が学校のシンボルであるという意識を強く持っている。そして、クスノキに対するイメージとしてマイナスな意見はなく、守ってくれる存在、休息できる場所等の意見が多かった。また、クスノキを通して他の樹木に対しても大切にしたいという心情が育まれており、児童はシンボルツリーであるクスノキを中心として、様々な樹木に対して関心があるものと考えられた。なお、そうした成果は熱心にクスノキを用いた学習を展開する教員の存在が重要で



あると考えられる。そうした教員の下、クスノキのような樹木を授業で活用して児童が樹木と触れ合うことができる機会を多く作ることで、児童の巨樹やその他の樹木に対する興味関心を増大させ、心情のみならず保護に係わる活動等の行動面への変化に繋げることができるのではないかと考える。

境情報科学センター、環境情報科学論文集13号、  
pp.25～30

## 引用・参考文献

- 1) 長友大幸、下村孝 (2006) : 校庭の巨樹を用いた環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響、日本造園学会、ランドスケープ研究第69巻5号、pp.829～834
- 2) 長友大幸、加藤博、岡田準人、下村孝 (2011) : 中学校の総合的な学習の時間における巨樹・高木を用いた環境教育の実践効果、日本造園学会、ランドスケープ研究第74巻5号、pp.735～738
- 3) 旧 A 小学校ホームページ<<http://angyo-e.sakura.ne.jp/old/ecoclub/shokubuzukankoutei/shokubutuzukankoutei.html>>、2019.2.8更新、2019.9.10参照
- 4) A 小だより平成31年4月号<<http://angyo-e.sakura.ne.jp/wp-content/uploads/2019/04/3104.pdf>>、2019.4.8更新、2019.9.17参照
- 5) 平成26年度 A 小子どもエコクラブ<<http://angyo-e.sakura.ne.jp/old/ecoclub/hurusatonomori/26nendo/angyouhara.html>>、2015.3.21更新、2019.9.17参照
- 6) 長友大幸、近江慶光、丸田頼一 (1993) : 住居系市街地における巨樹に係わる住民意識に関する研究、日本造園学会、造園雑誌第56巻5号、pp.283～288
- 7) 長友大幸、下村孝 (2010) : 校庭に残存する巨樹への接近頻度と環境教育受講経験が児童の意識に及ぼす影響、日本造園学会、ランドスケープ研究第73巻5号、pp.741～746
- 8) 近江慶光、長友大幸 (1999) : 小学校における高木・巨樹を用いた環境教育に関する研究、環